飛田雄一

あそびエッセイ

目次

はじめに
●その１＜１０円玉「総どり」あそび＞
●その２＜ビー玉あそび＞
●その３＜「くちくすいらい」＞
●その４＜「ようちん」＞
●その５＜「釘さし」＞
●その６＜「Sケン」＞
●その７＜トンボとり＞
●その８＜カナブンとり＞
●その９＜カブトムシとり＞
●その１０＜バッタとり＞
●その１１＜ドジョウとり＞
●その１２＜ドンコとり＞
●その１３＜潮干狩り＞
●その１４＜インサイ＞
●その１５＜階段ジャンケン＞
●その１６＜「ジャンケンデーホーーイ」＞
●その１７＜「ぼんさんがへをこいた」＞
●その１８＜三角ベース＞
●その１９＜倶楽部のはしご＞
●その２０＜お盆で駒まわし＞

●その２１＜水鉄砲＞
●その２２＜だいこん鉄砲＞
●その２３＜マッチ箱撃ち＞
●その２４＜竹馬＞
●その２５＜ほたる＞
●その２６＜うなぎ釣り＞
●その２７＜一斗缶のとんど＞
●その２８＜スッポン＞
●その２９＜北斗七星＞
●その３０＜〇〇さん、××さん＞
●その３１＜牛乳ビンのふた＞
●その３２＜スズメとり＞
●その３３＜竹トンボ＞
●その３４＜スピード（カードゲーム）＞
●その３５＜インデアンポーカー＞
●その３６＜「かってうれしい、はないちもんめ」＞
●その３７＜へちま化粧水＞
●その３８＜「いいでんでん虫、悪いでんでん虫」＞

はじめに

Facebook に「あそびエッセイ」を書きました。2024 年 9 月 30 日から 11 月 25 日、計 38 回です。書いているといろんなことを思い出しました。コメントもよせられ、そのコメントから、また思い出すこともありました。

いろんなことをして、よく遊びました。大きくなってからの遊びもありますが、思い出すままにいろいろ書きました。

単行本にしてほしいと、というコメントもありました？そこで、調子にのってこの冊子をつくりました。エッセイに対するコメントの一部を転載させていただきました。ご了解をよろしくお願いします。

カットは、著作権フリーのものをネット上でさがしていれました。もし、フリーでないものがあれば、教えてください。

2024 年 12 月 1 日

飛田雄一

●その１＜１０円玉「総どり」あそび＞

　ハイキングに行く。広場で、５Ｍほど先に線を引く。その線に向かってコインを投げる。その線に一番近いところに投げた人が「総どり」する。このシンプル、大胆、かつ賭博的な遊び、すてきだ。正月に家中でそれをしたことがある。机の端から１０円玉をもうひとつの端に指で飛ばす。その端にいちばん近いのが勝ち。ぎりぎりを狙うとテーブルから落ちてしまう。盛り上がる。

　その「総どり」遊び、ジャンケンバージョンもある。ある青少年プログラムでしていた。メンバーが１００円玉を一枚ずつ持ち、隣の人とジャンケンをする。負けた人は退場、勝った人は２００円となる。更にジャンケンをする。４００円になる。８００円になる。勝ち残った人が奇数になり、対戦相手がいなくなると、すでに退場した人が手に８００円を持って、再チャレンジする。最後に一人が勝利者だ。１００人なら１万円＋αだ。青少年プログラムとしてはどうかと思うが、おもしろかった。

（**コメントより／**「懐かしいね。100 円でなく 10 円玉で良くやったねー」。「バクチ、嫌いじゃないぜ」

●その２＜ビー玉あそび＞

　ビー玉あそび。よくやった。むかし、ラムネの瓶にビー玉が入っていた。割って、ゲットしたこともある。

「３穴」をしていた。地面に小さな穴を手前から３つ掘る。一番遠くの穴に順番にビー球を投げる。穴に一番近い人からスタート。

　穴から、左手の親指小指の間をいっぱい広げる。そして親指を右手小指につないで、ビー玉をくりだす。他人のビー玉に当てれば次の穴に進める。次の穴に転がして入れてもいい。そうして次の穴に進んでいく。

　そして、３穴、２穴、１穴、バックして、２穴、３穴へ。そしたら勝利。他人のビー玉を、総どりできる。

　なんか、ルールが違っているような気もするが、こんな感じである。ネットで、ビー玉あそびを検索しても、この「３穴」はでてこない。これも兵庫区都由乃町、石井町あたりでだけの遊びなのか。

　ビー玉に当てるとき、上級者は直撃する。転がすのではない。これが、醍醐味だった。

　以上、書いてみたけど、分かってくれた？

（**コメントより**／「我々兵庫区中部は穴一つでした。穴の左右に線を引いて当てやいっこして遊んでました。ちょっと違いま

すね」。「ビー玉やりました！３穴は記憶にないです。あの頃はいろんなごっこ遊びやってました。おしくらまんじゅう、馬跳び、かくれんぼ、かんけり、ゴム跳び、蝋石でケンケンパー、メンコ、相撲ごっこ、プロレスごっこ、ままごと等々思い出すだけで幸せな気分になります」。「うんと子どもの頃、田舎の従兄弟からたくさんもらって帰って、得意げに近所の子どもたちと遊んだといが、あっという間に負けて粗方とられて泣きながら家に帰って母親に笑われるとい苦い思い出があります・・・」。「松本通でも３穴やってた。ルールはそんな感じだが詳細は忘れたなあ。ワシは強かった(^^)」。「『さんけつ』はなんとなく思い出す。ラムネ瓶から取り出せなくて、わたしはあきらめていたなあ。覚えているのは、あちこちまちなかは穴だらけ。穴をふまないように歩いたこと。“らむね”で遊んだ土の道はてかてかに光っていました」。「京都の伏見では、ラムネ玉を指で弾いて相手の球に当てて取る遊びを“インキョ”』と言って、1950 年代に流行しました。語源は不明です。」。私も、“インキョ”、聞いたことがあります。

●その３＜「くちくすいらい」＞

　よく遊んだ。町内でもやった。が、小学校の遠足で塩が原（修法が原）にいったときは規模が大きい。総勢 300

人ぐらいでやった。

ネットで調べた。あった、うれしい。

「駆逐水雷 ルール」

基本ルール 二組に分かれ、それぞれの組で (a) 戦艦 1 名、(b) 駆逐艦 (c) 水雷艇 各若干名の 3 種類の役を割り振り、戦艦は敵の駆逐艦を、駆逐艦は敵の水雷艇を、水雷艇は敵の戦艦を撃沈することができ、戦艦が撃沈された（戦艦役が捕らえられた）組が負けとなる。

水雷艇は、戦艦を撃沈すべく攻め込む。でも駆逐艦にタッチされると捕虜となる。

陣地はそれぞれ小高い山。広大な公園でくりひろげられる。捕虜は、それぞれ陣地につながれる。捕虜が多くなると、その列も長くなる。相手側は、防御をかいくぐって、その捕虜の列を空手チョップで切る。捕虜奪還となる。（たしか、自陣に一度戻ってから復帰可能となった）

水雷艇は、すぐに見分けたつくように、手で野球帽マーク（たしか)。駆逐艦マークは忘れた。

ほんと、塩が原の攻防はすごかった。いま、それをやったら、やばい。足はもつれ、転倒まちがいない。すぐに捕虜になり、空手チョップで切られても、逃げる気がおこらないだろう。

（写真は、アシスト自転車で塩が原へ。2020 年 4 月。）

（**コメントより**／「わたしは当時、馬場町（今は下祇園町に編

入)。校区は隣だが直線距離で 800m ほど離れているにすぎない。にもかかわらず、“くちくすいらい”と言わなくて“くじっく”と言っていた。よく遊びました。駆逐水雷と判明したのはここ最近」。「懐かしいね。帽子を横に被ると駆逐艦、後ろにかぶると水雷、前に被ると戦艦と帽子のつばが前か横か後ろかで分けてたように思います^_^」。そうですね、帽子のかぶり方、そうでした。

●その４＜「ようちん」＞

「ようちん」、これも遊びだ。「ようちん」、ネットで調べても、あそびの「ようちん」はでてこない。「ヨードチンキ」はでてくる。ヨードチンキ、水銀が含まれていると製造中止なったのかと思っていたら、今も販売しているようだ。その水銀入りは「赤チン」だったかな？　これは本論と関係がないので、話を進める。

「ようちん」は、ボルト、ナットのナット。しかし、ナットのようにボルトを締めるものではなく、平らな４、５センチほどの鉄の輪っかだ。どなたか、名前を教えて。

どうして遊ぶか。３、４メートル先に「べったん」を２、３枚重ねたものが、４、５個ある。そのべったんに、ようちんを投げる。転がしてもいい。そして、そのべったんの上にようちんがのれば、勝ち。そのべったんをもらえる。単純なルールだ。

「べったん」？　標準語では「めんこ」というらしい。絵の描いたカードだ。野球が多かった。

べったん、普通は、高いに地面たたきつけ、相手のべったんを風圧でひっくり返したら勝ち、というものだ。ぼくらは、もっと高級な「ようちん」で「べったん」をとりあう遊びをしていたのだ。

（写真は、ワッシャーとべったん、またの名はめんこ）

（**コメントより**／「ようちん は知らなかったです。ちなみにボルトとナットのあいだに挟んで緩み防止するのはワッシャー」。そうでした。ありがとうございます。「めんこはよくしました。うちらでは“ぱんへい”とも言っていました。村山や稲尾の図柄を覚えています」。ふむ、村山、稲尾ね、なつかしい。）

●その５＜「釘さし」＞

怖そうな遊びだ。２人でするときは「一」、３人でするときは「人」、４人のときは「十」。それ以上のときは適当に地面に書く。

そして、各自、釘を持つ。５寸釘だ。地面に突き刺してうまく突き刺されば、その場所と「一」の端とを５寸釘で線をひく。成功すれば何回でも釘を刺す。線をつないでいって、相手方が逃げられないように囲む。そして、最後に、自分の 1 周前の線の上に釘をさせば相手は逃げられなくなり勝利する。5 寸は、15.15 センチとのこと。だいぶ長い。

ルールを書きながらなかなか説明がむつかしい。分っていただけただろうか？

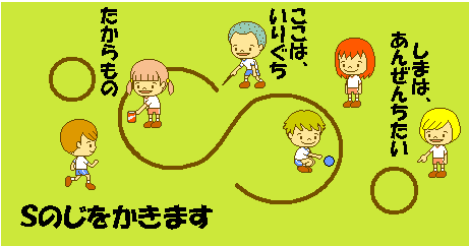
５寸釘を地面に刺すのがけっこうむつかしい。技術がいる。ときどき、家から大工道具の「錐（きり）」をもちだして使う。錐が痛むので内緒だ。でも、錐では地面に刺すのが容易すぎて、勝負としては興味がうすれる。

むかしは、どこにでも地面があった。いまは、ない。こんな遊びもできない。さびしい。

（**コメントより**／「未舗装の道路には、戦災のためか？、瓦礫が沢山埋まっており、両足が赤チンで赤く染まってました。高校生以降は頭が赤く染まってました(^_^;)」。？？。「前回の帽子のつばで区別してのあそび、“駆逐水雷”と呼んでいた。小学校の時の冬の遊びでした。たぶん運動会の流れで、ほとんど全員が帽子を持っていたのだと思う。しかし中学、高校ではもうやらんかった。釘さしもなつかしいねー」。「下駄を

履いていて、手許が狂って足を傷つけて痛い思い出があります」。

●その６＜「Ｓケン」＞



地面に大きな「S」を書く。上下５M、左右３Ｍぐらい。参加人数、だいたい偶数。

それぞれ隊長を決める。その他の兵隊が出陣する。「S」の外では、ケンケン（片足）でないといけない。敵の兵隊を見つけたら、両手を組んで体当たりする。相手がこけたり、両足をついたりしたら、その兵隊は死ぬ。そして、敵陣に攻め込んで隊長にタッチしたら、勝ち。

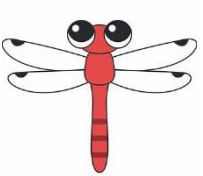
これは、書きやすかった。これ以上シンプルなルールは、ない。

Ｓケンよりも更に過激な遊びもあった。名前は忘れた。攻撃側と守備側が分かれている。大きな島（５Ｍ×８Ｍ？）に出口がひとつ。島のまわりに小さな島がいくつかある。島では、両足でＯＫ。それ以外（海）では、片足。Ｓケンのように、体

当たりする。最後に敵の大将にデンすれば勝利だ。このケンケンをしすぎたのか、先日の運動機能テストで、私は右足の筋肉量が多い。

（**コメントより**／「S ケン、やりました！楽しかったです。5 時のチャイムがなるまで校庭で遊び呆けていました。塾も少年野球もなくて場所もとったもん勝ちで、塾や習い事で抜ける子もなく校庭は使い放題でした」。「自宅は兵庫区でした。この遊びはよくしましたが、その名前は S にくだん（肉弾？）だったと思います」。遊びの専門家・山田利行さんからは、「両手を組んで体当たりする。思い切りぶつかり合いました。Sケンではないけれど、ぶつかり合う遊びを子どもにさせたら、“こんなん危ないわ”と言われました。馬乗りでも上の馬が暴れたら、“あぶないから、やめて！”と言います。えらいこっちゃ」。ふむ。

●その７＜トンボとり＞



石井川（神戸市兵庫区）沿いの道でよくとった。車はあまり通っていなかった。トンボは、人間と一定の距離をとる。人間の頭の４Ｍ？上を飛ぶ。人間が頭をさげるとトンボの航路もさがる。

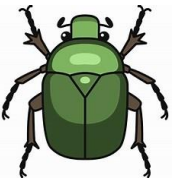
網でとることもあったが、釘と紐でとった。二本の小さな

釘を紐でつなぐ。そんな長い紐でなくていい。

　それをぐちゃぐちゃにして、トンボの航路の前に投げる。トンボは虫と思って飛びかかる。紐と釘にからまって落下する。つかまえる。そううまくいくものではないが、ときどきひっかかった。打率は、一割以下だった。

（**コメットより**／「トンボ釣りですね。私は捕まえたヤンマを紐にくくって、別のヤンマを釣るというやり方でした。今でも、トンボ釣り大会をやるグループ（関西トンボ談話会）があるようです。神戸では、ブリ、マンリキと呼ばれていたそうです。http://www1.kcn.ne.jp/~matsudai/bunka.html」。「小石を2個凧糸で繋いで投げた。小石を結ぶのが下手なら、糸が緩んで小石だけ外れて飛んで行った。まだまだその辺りの草っぱらでやったが、ブヨに噛まれて、腫れ上がって酷い目にあったのを覚えている」。「トンボを網で取るときは、トンボの前上の空間を振り回していました。蝶は止まっているところを確かめて、下から上に網を上げる。あきもしないで、毎日やっていました」。「おっしゃるように、飛んでいるコースの下を子らがいました。取りもん勝ち。回る糸の中心が獲物(蚊？)に見えるようでした」。

●その８＜カナブンとり＞



　カナブン。ネットでしらべるとカナブンと

コガネムシは違うらしい。でも、いまは、どうでもいい。

ふつうに今でも、街中をとんでいる。最近のカメムシのように。

またネットに、カナブン駆除の方法、なんてのがある。許せない。なんで駆除するのか。

このカナブンを大量にとる。大量だ。１００匹またはそれ以上、一気にとる。

幼少期に近くに石井の森があった。昆虫のすきな蜜のでる木がある。そこにカブトムシはいないが、カナブンがたくさんいる。二本、木があった。

一本の木で、２、３０匹とる。そして、もう一本の木で２、３０匹とる。それを２、３回くりかえす。虫かごに入りきらなきらないほどとれる。

そのあと、どうしたのだろうか？　記憶にない。

紐をくっつけて飛ばして遊んだことはある。「虫めでる王子様」か？　紐を、羽根と頭のあいだに無理やりくくりつける。カナブンは痛かっただろう。

（**コメントより**／「カナブンは、なんて呼んでいらしたのですか？　私も神戸生まれ神戸育ち（金星台の近く）ですが、カナブンって呼んだことないです。子どもの時、近所の男の子たちと蝉取り、ブイブイ取りによく行きました。そうです、“ブイブイ”と呼びました。また、クマゼミも一度もクマゼミと呼んだことはないです。私たちは“ジャボ”としか呼びませ

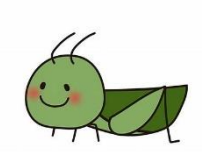
んでした。ジャンボから来たのかな？と推測しています」。「田舎ではブイブイと呼んでいました。しかし、そんなに大量に取ったことはありません」。「藁しべ長者が藁しべにくくったのはこれかなー。アブと書いてるのもあるけれど、あれはくくれないだろうから」。

●その９＜カブトムシとり＞

石井の森から更に山に登る。朝、カブトムシがとれるという。それらしい木の根元を足でける。ときどき、カブトムシが落ちてくる。これは、打率がほぼゼロに近かった。

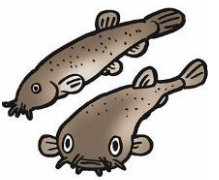
（コメントより／「飛松中学の裏の山にカブト虫、クワガタ、ブイブイが群れる木がありました。(蜜を吸いに来ていたと思います。巣うちんとか巣っちんと呼んで、秘密にしておく。)ただ、そこにはスズメバチも居ることが多く、結構怖かったです」。「貴重品扱いのカブトですが、わたしが子どもの頃は、ふんだんにいて、黒光りがしていた。角と力比べしたら、角がちぎれてしまい、かわいそうなことをしてしまった。両手で、閉じようとしている角をひっぱり分けたということです」。

●その１０＜バッタ＞とり



　バッタはどこにでもいた。
　大きいバッタ。空を飛ぶとめだつ。着陸時点をみさだめて、捕まえる。
　足をもつと、バッタがばたばたとする。人間がみるとおじきをしているように見える。おじぎバッタと言っていた。
　かわいそうなことをした。
（**コメントより**／「イナゴやザリガニは食べたことがあります。イナゴは串焼き、ザリガニは醤油煮」。「連れだっていた田舎の人は、トノサマバッタを食べていた。腹がニガイので、トノサマは敬遠しました」。

●その１１＜ドジョウとり＞



　石井川の上流、烏原貯水池の下流。
　鍋の上に布をかぶせて、あたりに砂をかぶせる。布の真ん中には、丸い穴があけてある。ドジョウが入れば出られなくなる。
　何回もしたが、一匹もとれなかった。
（**コメントより**／「当時は“ドンキュー”と言っていた。おかげでいろいろと思い出す。ドジョウはつかむと“キュー”と鳴きま

す。普通につかんだのであれば、すべる。頭から首の方向にしっかりつかむ。すると、鳴くのです」。「韓国では、今もよく食べます」。「金沢でも食べます」。

●その１２＜ドンコとり＞

ドンコ。神戸弁だと思っていたら、そうでないらしい。

ウイキにもあった。

ドンコ（鈍甲、学名: Odontobutis obscura）は、スズキ目（2016 年発行の Fishes of the World 5th Edition では Gobiiformes 目）ドンコ科に分類される魚類。／分布、愛知県・新潟県以西の本州、四国、九州、大韓民国巨済島。

須磨の海にもいた。ドンコは平べったい魚。目だけが、砂の上にでている。

ウイキに、「全長は 25cm に達し、日本産の淡水ハゼ類としてはカワアナゴ類に匹敵する大型種である」とあるので、須磨のドンコは、大きくて１０センチ程度。別種かも？

モリで、それをつく。何匹かとった。自身の足を刺して泣いていた子もいた。私も刺しそうになった。くわばらくわばら。煮つけにしたらおいしそうだが、どんな味だったか、覚えはない。

（**コメントより／**「食いもんって感じはなかったですね。西宮浜にもいました」。「海にいるのはハゼでドンコは淡水にしかいない。川の石に張り付いていたのをよくとりました。あまりすばしこくないので簡単にとれる」。「子供の頃、須磨海岸でテンコチ採りをよくしました。テンコチとドンコは違うの?」。わたしのまちがいで、ハゼの方でした。「どんこみたいなやつとよくバカにされましたね。ドンコはシイタケなら美味しい大きなキノコですが、魚のドンコはどうしようもないトロイ魚のイメージでした（笑)」。ふむ、「どんくさい」と関係があるのでしょうか？

●その１３＜潮干狩り＞

神戸ＹＭＣＡ余島キャンプ（小豆島)。私はそこで泳ぎを覚えた。バッチテストがあって、初級はくらげバッチ。そのあと、メダカ、トビウオ、最後はイルカだったか。私はトビウオまでいったかな？　でも、おかげで、泳げるようになった。クロールは苦手だが、１、２時間は沖で泳いでいることができる。平泳ぎと立ち泳ぎだ。

キャンプ場で、地元の余島さんが貝をとっていた。唯一の住民が、余島さんだ。

貝は、有料の潮干狩りでとったこともある。やみくもにス

コップで掘り返してとる。

ところが、余島さんは、違う。順番に畑を耕すようにして、とる。私もそのようにして、某所でとった。そこは、自然の海だったが、たくさんとった。余島さんのおかげだ。

（**コメントより**／「幼い頃は甲子園浜でも採れたれたのですが、程なくコールタールで汚れた海になりました😰」。「高砂のあたりの浜で潮干狩りしました。まだマイカーなんてない時分で、重たい貝を持って電車で帰って、くたくたでした」。「昔は魚崎の浜でもアサリがとれましたね❗キスもテンコチもよく釣れました。地引網もひきを手伝ってイワシなんかをもらいました」。

●その１４＜インサイ＞

テニスの一種。小学校でよくやった。「インサイ」は、おそらく、インサイドテニス（屋内テニス？）。

当時、湊山小学校の校庭は過密。遊ぶ場所にも制限があった。

各グループの広さが〇M×〇M 以下と、決められていた（いちおう）。制限がなければ、本当は、ドッチボールがしたかった。

インサイのルールは、テニス的、バトミントン的、ピンポ

ン的。ボールはやわらかいテニスボール。要は、２人ずつで、ボールを打ち合うのだ。３、４ずつで対決も可。ラケットはない、手で打つ。なかなか、もりあがった。

（**コメントより**／「“いんさい”という言葉は、はっきり覚えている。しかし、遊びかたは……。“士農工商”とか、ほかにも分け方があったが、このことかな？　４つにわけて手でやわらかいボールを打つというのは、たぶんこれだ！」。「なんか枠外に順番待ちする枠があって４が負けると交代したりして」。そうでしたね。

●その１５＜階段ジャンケン＞

たとえば、近くの 20 段または 50 段でした。私の幼少時の家の近くにあった。

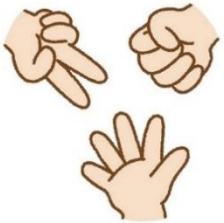
ジャンケンをする。パーで勝てば５歩。チョキで勝てば２歩進む。グーは、１歩だったかな？　上まで上がれば、また下ってくる。どうしたら、勝ち、だったのだろう。

チョキで買ったら、「チヨコレート」、６歩というのもあった。パー、グーはなんと言っていたのだろう。

父母の通っていた神戸教会の階段でもよくしていた。学校の帰り、３、４人分のカバンをかけて？、ジャンケンで負けたら、次の電信柱までかついだりもしていた。５０段は、「センチメンタルジャーニー・湊山小学校」https://ksyc.jp/mukuge/hida-minatoyama.pdf　参照）

（**コメントより**／「私の時はグーは“グリコ”で３歩、パーは“パイナツプル”で６歩、チョキは“チヨコレイト”で６歩でした」。「この階段平野の名所ですよね」。「勝ちはきっちり上の段まで行けた場合でした」。なるほど。そうでした。いきすぎるとも一度でした。「ここでやりました。手すりのところにまたいで、お尻から滑り降りてくるとかてっぺんまでダッシュで競争とか一段飛ばしで登るとか、登りきったら掘割（崖？）がありました」。「５０段は手摺を股に挟んで滑り降りるという危険な遊びもあった」。そうでした。私は、あるところをしこたま打ったことがあります。

●その１６＜「ジャンケンデーホーーイ」＞



ジャンケンは、「ジャンケンホイ」と勢いよくやるのが、正しい。「おあいこ」の時に「アイコデホイ」。これも勢いよくやる。更に続けば「アイコデホイ」「アイコデホイ」「アイコデホイ」。これ

でこそ、ジャンケンだ。

このごろ、なぜか、「ジャンケンデーホーーイ」というのを聞くようになった。わたしは、江戸っ子じゃないが、まどろっこしい。やめて、ほしい。

「さいしょは、グー」。これは、ドリフターズが始めたのではないか？　まあ、これは許せる。

（**コメントより**／先の遊び専門家の山田さん、「遊びの研究をしている者としては、いろいろと言いたいことはあります。ドリフの“さいしょは、グー”は許したくないなあ。三すくみのこの約束事は、タイミングが命です。このタイミングが子どもの生きる力をあらわしていたのです。“さいしょは、グー”はおとなの約束方式です。かこさとしは、じゃんけんだけで分厚い本を書いています。もっとも“さいしょは、グー”はドリフの創作ではなく、これも一地方、どこかですでに演じられていたと、かこさとしは言っています。地方の文化は地方に留まっていました。テレビ文化が、一気にジャンケンをうすっぺらなものにしてしまいました」。「インジャンホイとも言った」。「ジャンケンは、広島の一部の地域で“ジッケッタ！！”と言われていた気がします」。

●その１７＜「ぼんさんがへをこいた」＞

壁または木に、腕と腕をつけて、「ぼんさんがへをこいた」。

　その間、周りの子は動いてもいい。そして、だんだんと、近づく。いい終わった瞬間に動きを止める。動いていたら、負けで、次にその子が、「ぼんさんがへをこいた」。

　なんでもいいのだ。「ぼんさんがへをこいた」が、１０を数えるにいちばん早い言葉なのだ。「いちにいさんしご・・」と数えるより、ずっと、早い。神戸では、「だるまさん」はころばないのだ。

　「堂馬」もしていた。壁または木に両手をついて、その上に別の子がのる。下の子は、それを振り落とそうと暴れる。上の子が、「ぼんさんがへをこいた」というあいだ落ちなかったら上の子の勝ち。

（**コメントより**／先の山田さん、「“どうま”って、そんな字があるのですか！　当てる文字があるとは、考えなかった。その堂馬を子どもたちに演じさせたことがあります。1970 年代。“こんなん危ない。遊ばれへん”」と。“愛の不時着”最終話で子どもたちがかくれんぼ。日本語字幕は“だるまさんがころんだ”。まさか、そんなことを唱えているはずはない。“むくげの花が咲きました”らしいです。飛田さん、確かめてください！　第16話39分すぎです。」。胴馬のようです。冬ソナは、まだ調査中です。「20 かぞえるときは“においだらくさった”。一人が壁を背に立ち、そのまたぐらにもう一人があたまをい

れて、つかまる、さらにもう一人が頭を入れて、なんにんかが並ぶ。べつのぐるーぷが、一人ずつはしっていって飛び乗った。できるだけたかくとんで、おちるいきおいで馬をくずした、こんなきがします」。これが正しいようです。「つづきは、“こいたへはくさかった”ですよね。大阪人です」。さすが、大阪。

●その１８＜三角ベース＞

野球。狭い道でやるので、一塁、二塁、ホームベースしかない。ベースといっても、地面に線をひいたものか、電信柱だ。バットがないときは、手で打った。

やわらかいテニスボールでやる。ときどき、ファウルとなって、人の家の庭にはいる。順番に、「すみません、ボールとってください」を言っていた。庭に入ってとって、と優しくいってくれる家もある。どなられる家もある。しかたない。

狭い「球場」のおかげで、ピッチャー返しの本格的な打法がみについた。普通の野球で、ピッチャーに当たらないように、左右にずらして打つぐらいの腕前になった？

この野球は、放課後に、雪之御所公園などでしていた。やはり過密だった。

我が兵庫高校のグランド。ここも過密だった。野球部員の

打ったライナーがラグビー部員の頭を直撃したことがある。体が浮き上がるほどだった。救急車がきた。なんとか大丈夫だったようだ。

兵庫高校には、よく救急車が来ていた。兵庫高校の「校技」はラグビー。授業で、した。先輩たちは、先生のところにパントをあげ、両軍の全メンバーがそこに突進した、と。

その後、その先生は、パントが自分のところにくると、審判を放棄して逃げた、と。

（**コメントより**／同級生の原三郎さん、「兵庫高校の我々の 2 年上の学年は甲子園組、ハンドボール部はサードの後が練習場所、打球の音の度ドキ!?　甲子園組卒業後、サードとショートの間に野球部に声を掛ける専門部員を置かせた。しかしチョロい打球しか来なかった。!?😂😂😂」。「独自のルールがあって、長屋の屋根に載って落ちて来るボールを取るとアウト。屋根を越すと直ちにチェンジ。ボールを探すのが大変だからです」。“落ちて来るボールを取るとアウ”。そうでした。

●その１９＜倶楽部のはしご＞

私は中学時代、器械体操部。東京オリンピックが 1964 年。中学 2 年。遠藤幸雄らが活躍していた。練習場の体育館には、ブラスバンド部も。

親友の和気君がクラリネットを吹いていた。貸してもらって吹いた。音がでた。うれしい。しばらくして、ドレミファソラシドがふけた。ほめたもらった。うれしかった。

高校でも器械体操部。練習前には、いろんなクラブにあそびに行く。軟式テニスにも行った。軟式テニスの校内大会にもでたことがある。テニス部員が、「この一点が大事だ」と教えてくれたが、そのときはミスした。最後まで、点の数え方が分からなかった。

器械体操の練習は、基本的に体育館。過密な体育館だった。我がエリアは、体育館の真ん中だが、バレーとバスケットの間、狭い場所だ。マット運動で、宙返りし、着地を決めようとしたら、そこにバスケットボール、ということもあった。こけた。いたかった。

試合前、「床運動」の練習のときには、「申し訳ありません」とバレー部に場所をゆずってもらった。バレー部は、強かった。マットのない本当の「床」での床運動だった。

私は平行棒が得意だった。吊輪は苦手だった。吊輪は、両手でささえるところまで登るのが大変だった。よじのぼるにも、棒がない。懸垂をして、更にその上までのぼって、やっと落ち着くのだ。もちろん、上手になればふって、ひょいとできる。

その吊輪、もう一度やりたい。十字懸垂は当時もできなかった。「脚前挙」くらいできる？

●その２０＜お盆で駒まわし＞

駒まわし。子どものころの定番あそびだ。正月はもちろん、一年中？やっていた。

木の駒を地面でまわす。土俵をかいて、その中で戦う。相手が止まったら勝ち。

鉄駒もあった。木の駒のまわりに鉄がついていた。これは、相手の駒をはじき出す力がすごい。土俵のかわりに、「お盆」の上ですることもあった。木の盆だ。まん中が少しへこんでいて？、駒どうしがよくぶつかりすばらしい勝負となる？

再度筋（神戸市生田区、現中央区）に住んでいたころ、宇治川通りへ行っていた。そこで、かっこいい兄さん姉さんの駒まわしをみた。蓋のない木の樽。そのうえにゴザをひいている。ゴザのまん中がへこんでいる。そこで駒をまわす。その時は、女性１名、男性２名だった。

駒は、「べーごま」。べーごまは、むつかしい。普通の駒のように、紐の起点となる軸（鉄）がない。高度なテクニックで糸をべーごまにまきつけ、まわすのだ。

そのゴザからはじき出されたら負けだ。

われわれの駒まわし、鬼ごっこもした。手の上あるいは瓶の蓋で駒がまわっているときだけ、走ることができるのだ。鬼ももちろん、駒がまわっていつときだけ走れる。

瓶の蓋の２ヵ所に穴をあけてゴムで手に固定し、そこに駒をまわす。駒を投げあげてその蓋でうけるのだ。上級者になると、鬼が近づいたときに、ひょいと駒をまわして逃げるのである。右手で駒をなげあげ、右手の蓋で受けるのだ。私は、ビール瓶の蓋を使っていた。

そんな、芸当のできない子どもは、地面においたお盆（お皿）の上に駒をまわして、そのお盆をもって走るのだ。それもできない子は、地面でまわした駒を下敷きで救上げてお盆に入れたのだ。

上級者の私は、「駒の谷渡り」なんかもしていたな。「地球駒」というのもあったなあ。

去年、木曽駒が岳に登りました。

（**コメントより**／「ベーゴマは、（貝ごま）とのこと。東播磨では、あまりしませんでした。こちらは、木の独楽や鉄枠の独楽をしていました。缶の蓋に乗せて鬼ごっこ。低学年のできなかった私は参加もできなかったなぁ😉」。「ベーゴマはすぐ諦めたように思います。地球ゴマ？宇宙ゴマは面白かったです」。「大阪でやってました。紐を巻くのが難しい。大阪ではバイと呼んでました」。「神戸でもバイと言っていました。垂

水です」「

●その２１＜水鉄砲＞

竹でつくった。中から水を押し出す細い竹には、布をまいた。もちろん、鉄砲の先には適当な穴をあける。けっこう飛んだと思う。

水鉄砲より小さいのは、杉てっぽう。杉の実は小さいので、本体の竹も小さいもの。中にいれる竹は更に細い。高級品だ。

でも、中が竹のものは、せいぜい、紙てっぽう。紙（鼻かみ）を水につけてまるめ、玉にした。八手（やつで）の実を玉にしたこともある。八手は、どこにでもあった。なぜか、トイレの近くに多かった。

本当の杉鉄砲は、ほんとに細い丈夫な竹と、中は自転車のスポークを使う。これがなかなかむつかしい。空気がぬけて充分に圧が加わらない。紙でも八手でも杉でも外の竹に密着させて、空気圧をかけなくてはならない。ふつうの針金ではだめで、曲がらないスポークが必要なのだ。

いま、水鉄砲というと、プラスチックの水でっぽう。100円ショップでも売っている。バズーカ砲のようなものもある。

水鉄砲で、戦争ごっこをした。われらの手製の水鉄砲の方が平和だ。と、いうようなことは、ないな？

（**コメントより**／「新聞紙を噛みましたよ。おとなになってから

噛んだら、子どものときより、噛み方十分じゃない。噛んでいるとオェッとなってくるし、熱心に噛めない。当時は、青洟（鼻汁）も出していたしなあ。拭いたそでが光ってた。杉玉はむずかしい。学校の門の外で売りにきていたから、それを買ったなあ」。「竹鉄砲を思い出しました。弾は新聞紙です。口に入れて、唾液でぐちゃぐちゃにして、一つは弾、一つはピストンの空気詰め。竹は筒用、ピストン用の 2 種類とってきたように記憶します。」。そうですね、それで空気圧がかかって飛んだんですね。「ヤツデの身を玉にもした。家の便所のそばにあったのでよく使った」。やはり、トイレでした。

●その２２＜だいこん鉄砲＞

「大根鉄砲」もつくった。竹の半分を半分にする。説明がむつかしいが、長さ 20 センチ、太さ 3 センチ？の竹の下半分は持ちやすいようにそのままにして、上半分は半分を切り落とす。

切り落とした部分に穴をあける。そして竹で「弓矢」のようなものをつくる。その弓矢の太い部分にゴムを挟めるような溝をいれる。輪ゴムを何本かをひっかける。弓矢の先に大根（1センチ×1センチ？）を刺す。弓矢を引っぱる。そして、

はなす。弓矢は竹の中でガチャンととまり。大根だけが飛んでいく。エネルギー保存の法則だ。

あんまり大根を消費すると怒られる。ニンジンでもいいが、突き刺しにくいので大根がいい。芋でもいいが、もったいなかった。

２連発も作った。穴を２か所あけ、弓矢も二つ作った。さらに上下の部分を半分切り取り、４連発大根鉄砲を作ったこともある。2、3 発撃っているうちに、残りの大根が落ちてしまうことも。でも、いいのだ。

インドネシアに大根鉄砲があった。うれしい。作り方、飛ばし方まで解説している。画像は、そこから拝借した。わたしの大根鉄砲よりきれいだ。

●その２３＜マッチ箱撃ち＞

マッチ箱。むかしはどの家にもあった。小さいのと大きいの。スナック、喫茶店も必ず？マッチ箱を配っていた。検便も、マッチ箱だった。

マッチ箱を４、５メートル先において、ねらう。玉は、広告の紙を折ったもの。たくさん作ってストックしていた。ゴムを親指と人差し指にかけて、玉を引っぱってはなす。私は、

名射撃手だった？

割りばしでゴムそのものを飛ばす鉄砲も作った。この場合は、ゴムそのものを飛ばす。先にゴムをひっかけ、手元に適当にゴムを止めるものをつくる。そして、バン！

割りばしの代わりに１センチ角の角材で、ゴム鉄砲もつくった。これは、ゴムも飛ばすが、紙玉も飛ばした。

紙玉のかわりに、「電線を壁にとめる金具」を飛ばした。

あるとき、友人の弟がそれをつかった。まちがって、その玉が逆にもどってきて、目にささった。幸い大事にはいたらなかったが、われわれ大きい子どもは、大目玉をくらった。

その遊びは、紙玉のものもふくめて、急速にすたれた。

（**コメントより**／「割り箸のゴム鉄砲は糸巻きのゴムで走らすタンクとよく作ったねー」。タンク、作りました。

●その２４＜竹馬（たけうま）＞

自分で作っていた。街でも売っていた。最近売られている竹馬は、靴をのせる部分（以下、「台」）がプラスチックだったりする。ちょっと、気にくわない。

私が生まれ育った石井幼稚園では、毎年、山に竹をとりに行っていた。七

夕用だ。キリスト教の幼稚園だったが、七夕祭りはしていた。別にそれはいいか。

その竹は、卒業生の家にとりに行った。烏原貯水池の奥にある。当時は、烏原貯水池のダム部分は、通行禁止だった。許可をもらって入った。そこで竹をきり、幼稚園まで引きずって帰った。その残りの竹で竹馬を作ったのかも知れない。

台の部分は、板で作る場合もあったようだが、私たちはそれも竹で作っていた。

小さいときは、一段目の節に台をつくる。上手になると２段目、さらに３段目となる。５段目ぐらいになると、高い台の上から乗らなくてはならない。

竹馬にのって鬼ごっこもした。先に紹介した「Sケン」もした。階段ジャンケンはできないが、階段は登っていた。危険きわまりない。いまならレッドカードだ。「竹馬（ちくば）の友」が、ほんとにいたのだ。

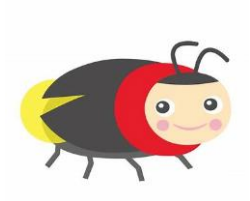
片方の竹馬を肩にかついで、ケンケンもしていた。なんのつもりだったのだろうか。機関銃のようにかまえて、戦争ごっこだったのか。

姉は、着物を来て竹馬に乗っていた。写真があったが、みつからない。おしい。

（**コメントより**／「竹馬は父が作ってくれました。高い台からしか乗れない竹馬は普段みてる景色が変わって見えて好きでした。楽しかったなぁ～」。「靴や靴下では乗りにくくて、裸足

で親指と人差し指をぐっと開いて。かなり竹を前傾させて乗るとうまくいきました！」。

●その２５＜ほたる＞



祖父・鈴木浩二牧師が、ホタルをとってきた。神戸教会に泊まりにいっていたときだ。わたしは小学校一年生？

教会は、元町駅から徒歩１０分？町のまん中だ。傘で、ホタルが飛んでいるところにかぶせて？、そのまま帰ってきた。当時でも、ホタルは珍しかった。

ホタルの光で勉強するほどは、とれなかった。

最近、阪急六甲あたりにもホタルがいる。六甲ケーブルの近く、大土神社。毎年楽しみに見にいっている。多いときは２、３０匹。最近はそんなにいない。

２、３０匹でもシンクロするときがある。感動した。誰がいいはじめるのか？、「そろそろやろか」と言ってするのだろうか。

インドネシアかどこかで、大きな木にホタルがむらがり、クリスマスツリーのようになり、それがシンクロするという話を聞いたことがある。ホタルは、シンクロするようだ。

その河原、クレソンの群生地でもあったが、なくなった。ボランティアおじさんが、あまりにもがんばり、石を積み上

げてあそび場をつくってくれたりしたものだから、クレソンも住みにくくなったのだろう。

実は、住吉川にももっとすごいクレソンの群生地がある。場所はひみつだ。さいきん、行っていない。たくさんのクレソンで、ビフテキを食べたい。

（**コメントより**／「小学校に上がるまで近江八幡で暮らすことが多く、祖父が大きな荷台に私をチョンと乗せてお堀端に群がるホタルを見に連れて行ってくれました。荷台はお尻が痛かったのですが、祖父の自転車は何時も楽しい所に到着するのでワクワクしてました」。「あぜ道では蛍の光が蛇の目とよく似ているので気をつけるよう威されていました。子供心に怖かったです」。「住吉川のクレソン、私も知ってます！」。

●その２６＜うなぎ釣り＞

夜店で、うなぎを釣った。２、３０年まえの話だ。元気のないウナギだった。それで、つれた。

生きている間に、料理した。３枚におろして、かば焼きにした。おいしかった。

家族ぐるみでお付き合いのあった淡路の宮本さん。毎年、ミカンを送ってくれた。わたしは小学生時代。宮本さんは母

と病院友だちだった。母は、椎間板で入院。宮本さんは首骨折。重症だった。でも、みんな、「お地蔵さん」といっていた。頭を動かせなかったのだ。

宮本さんは、農業をしている。ネコが田んぼの畦から？、ウナギをくわえてきた。ネコは、とった獲物を人間に見せたがるのだ。わが家の猫は、ランとクー。クーは野性的で、スズメをつかまえてみせにきたことがある。

宮本さんは、そのウナギをとりあげた。たたいたかどうかはしらない。おそらく元気な天然ウナギ、うらやましかった。（**コメント**／「そう、夜店のウナギ釣りほとんどハリスを切られて釣り上げることが出来なかった」。「田舎のお兄ちゃんがサイダー瓶でとりました。林田川（姫路）で。料理はしましたよ。ドジョウもしました。目打ちを頭に打ち、おとなしくなるように体をなぜ、開きました。60 年以上前ですね」。

●その２７＜一斗缶のとんど＞

とんど、といっても、大きなものではない。一斗缶。町内（神戸市兵庫区都由乃町）だけでも、そこらじゅうにあった。そこでたき火をするのだ。いまのように化学物質製品が少なかったので、環境的に問題がなかったかもしれない。

一斗缶の上をあける。缶切りでは無理だから、私はしてません。持ち運びやすいように針金をつけることは、したような記憶がある。

冬の夕方になると、その火に集まってくる。子どもだけでたき火をすることもよくあった。メラメラと燃える火をみながら、いろいろ話すのは楽しい。放火犯の心理か？

娘が小学生のころ、友人家族と長峰堰堤でキャンプをした。昼間にたくさんの木、落ち葉をあつめた。ほんとに、たくさんだ。

それでたき火をする。たき火はふたつ。子どものたき火と、大人のたき火だ。それぞれに話がはずむ。

アルミでつつんだお芋も、そこで焼く。おいしい。そのまま、ほりこんでいたかな？

夜、テントの外でゴソゴソ。イノシシだ。そっとしていたら、どこかへ行ってくれた。たき火が消えたのでてきたのか？

娘がもっと小さいころ、青谷の堰堤によく行った。そこではキャンプはしなかった。昼ご飯を食べビールを飲んだ。娘がそのビール瓶をもって、遊んでいた。写真をとった。かわいい。この写真はあるが、ひみつだ。

（**コメント／**「たき火ばかりしてるとおねしょするよと大人に言われていた記憶が・・。根拠はないと思いますが。たき火は今に至るまで、機会があれば燃やしてます。いろんな子ど

も達とあちこちで😅。放火魔では決してありません。炎のゆらめき、温もり香りを感じているのが好きなんです」。「廃材を燃やして、炭壺に入れて、消し炭を作っていた。消し炭は練炭の着火剤になった」。炭壺、消し炭の壺ありましたね。

●その２８＜スッポン＞

カメのスッポンではない。草だ。神戸弁で？、スッポン。標準語では、いたどり。

そこらじゅうに生えていた。とって、かじった。だいぶすっぱいが、それなりにおいしい。ネットで、セロリのように料理するのがあったが、したことはない。

またウイキで、次のようにある。

「「スカンポ」などと称して食用になり、根際から折り取って採取して皮をむき山菜とする。また、やわらかい葉も食用にされている。新芽は折り取るとポコッと小気味のよい音がして、太いものほど味がよく、生でも食べられ、ぬらめきがあり珍味であると形容されている」。この「ぬらめき」ってなんだ？　でも、この際どうでもいい。

そうだ、この「ポコッ」という音を覚えている。秋になると、それは、茶色くなる。背丈１．５メートルほどになる。

もろい。木？のようになる。

　そのスッポンで、「水車」をつくった。節の前後、５センチほどを、ナイフで、繊維にそって何本か切り目をいれる。そして、水につける。すると、それがそってくる。タコの足のように広がる。中に竹ひご？をとおして、流れにいれる。くるくると回る。ほんとに、水車だ。ながいこと、ながめていた。

　スイバもたべた。すっぱいけれど、おいしい？

　アケビも食べた。まん中の種をペッペッと飛ばしながら、食べた。

（写真は、ネットの「イタドリで杖をつくろう」より。私は作ったことはない。すぐ折れるんじゃないのかな？）

（**コメントより**／「父親から“スカンポ”と教わりました。懐かしい～」。「“エッタン”でしたね。若いときはポコッと音がして酸っぱい。大きくなると、けっこう、かたい。簡単には折れない。杖に出来ないこともないけれど、杖にするなら木の枝のほうが手間いらず」。「イタドリと呼んでましたね。腹減っ時に食べてた覚えがあります。懐かしいです」。「エッタンやグミは近くの山でよく食べました。エッタンは塩をつけて食べてました」。「大きく太いエッタンは中に蛇が入っているとの伝説みたいなものが流布していた。実は他のものに取られたくない者の流した噂だったかも」。初耳です。

●その２９<北斗七星>

毎晩のように見ていた？　星座表をみると、春によく見えるとのことだが。

北極星。北斗七星の先の２つの星の距離を５倍したところにある。

これは、英語で？「ポラリス」。韓国ドラマ「冬のソナタ」で知った。

ななつの星のひとつにある「衛星」。これが見えれば視力「１．６？」だと聞いたこともある。近眼の私には、まったく見えなかった。小学５年のときにテレビがわが家にきてから、急速に悪くなった。

落語、競馬などをよくみていた。落語は、いまもすきだ。最近は少しテレビ放映がふえたが昔はもっとあった。競馬は、馬の走るすがたがほんとにかっこいいと思っていた。

満点の星。なんどもみたが、上高地のはずれのテント場でみたのが最高だった。山友の斎藤千広さんと息子の３人。電灯はない。他のテントもほとんどなし。何時間もみた。空には、たくさん星があるのだ。天の川も流れているのだ。

神戸ＹＭＣＡの余島キャンプ場でもみた。当時、「テレスター」という衛星が飛んでいた。みた。アメリカの衛星だったのか。

土星の輪もみせてもらった。望遠鏡の大きさ？値段？によ

るのか、部分的にしかみえなかった。が、大感動でした。
（**コメントより**／「昔の余島は本当に星が良く見えたねー❗　星座早見表を持って星座や星の名前⭐を覚えた!アポロが月に降りてアームストロング船長が歩いたニュースを見た時は直ぐにでも月に行ける様な期待をしたがなかなか行けないねー」。

●その３０＜〇〇さん、××さん＞

この遊びの名前が分からない。車座になってやる。
入門は、番号。メンバーに番号をふる。そして、「１番、５番」「５番、７番」とやる。両手を２回打って、「７番２番」。番号を返すこと、自分の番号を言ったひとに返すことは禁止。隣の人も禁止だ。けっこう、むつかしいし、緊張する。
次の段階になると、番号ではなくて「名前」。「飛田、山田」「山田、古田」「古田、柳谷」とやる。同じく、返すこと、隣の人は禁止だ。調子にのってくるとだんだんスピードがあがる。たいへんだ。初対面の人が多いグループで、自己紹介のあとこれをやると大変だ。今の私は、自信がない。
数年間、韓国の公園で若者がやっているのをみた。手をたたく音がする。近づいた。が、声が聞こえない。
さらに近づいた。変なおじさんが来た。と、思っただろう

が、おっぱわれなかった。よかった。

やはり、声はない。「アイコンタクト」だ。すごい。究極のゲームだ。まだ、この遊びの名前は分からない。

（**コメントより**／「教会のキャンプではずっとやってましたネ。やんなん！！違ってましたっけ？」。「ナンバーコールだったと思う。けっこう頭を使う。高学年～大人向け」。それらしい名前ですね。「アイコンタクトまでとは！！凄いですねー！！」。ほんと、そうです。

●その３１＜牛乳ビンのふた＞

子どものとき集めていた。このエッセイ＜その４＞で書いた「ようちん」のめんこがわりにつかったこともある。

むかし、牛乳は宅配だった。どの家にも？木の牛乳ビンいれがあり、そこに毎朝配達されていた。気温もいまほど高くなかったのでよかったのか？

ラジオ体操の行き帰りにそれを飲む輩（やから）がいた。知らんけど。

みんな、からになった牛乳ビンに、またふたをして、もどしていた。

むかしの神戸学生青年センター。初代の自動販売機は、コ

カ・コーラ。ビンが７、８本、上向きに並んだのが、５、６列。５０円？を入れると、１本だけ、ビンを出口から出すことができる。

　が、自動販売機にあるビンを栓抜きであけ、ストローで飲む輩がいた。「無銭飲食（むせいいんしょく）」だ。ゆるせん。

　ちなみに、うどんの自動販売機もあった。当時の小池基信館長と高橋晄正先生が、おいしいおいしい、と食べていた。高橋先生は、センター主催の食品公害セミナーの講師だった。ええかいな？

（**コメントより**／「当時、私はサッカー部の監督をやってました。ところが、柔道部や野球部の握力の強いのとか、陸上部の砲丸投やっているようなのが、ビンの出口の下から手を突っ込んで全力で引っ張るとビンが取れたのだ。たいていの教師も生徒も居なくなった夕方になるとワルが牛乳やジュースを取っていた。ある時に有名なワルが私にその牛乳を見せて、先生２つ取ってきたから一つやるって言った。笑」。ええかいな？

●その３２＜スズメとり＞

　神戸大学農学部の学生だった私。農場実習に加西市の農場に通っていた。六甲台の農学部にもちょっと農場があった。温室で米を作っていた。

そこにスズメが、どこからか入る。簡単に出られないが、食べるものには困らない。

でも、退治することになった。メンバーは５名。４人がテニスラケットをもって、角に陣取る。スズメはにげまわる。それを軽く？、たたく。スズメは脳震とうを起こす。つかまえる。３、４０匹とった。ボレーの練習にもなる。

町の焼き鳥屋でときどきスズメも売っている。このテニスラケットによるスズメ狩り。焼き鳥にした記憶はない。

これまた石井幼稚園で、「さんだわらわな」でスズメをつかまえたこともある。

さんだわら。ウイキにはない。「さんだわらわな」もない。うれしい。

デジタル大辞泉に、「さん - だわら〔 - だはら〕【桟俵】読み方：さんだわら」とある。「俵の両端にかぶせる円形の藁ぶたをいう。日本で、神座や神饌の容器とし、正月には年神の御幣を刺したり、鏡餅をのせたりもする。疱瘡や麻疹がはやると、桟俵に御幣・赤飯・神酒などをのせて川に流した」というのもある。由緒ただしいようだ。作りかたまでネットにのっている。

そのさんだわらを米屋さんからもらってくる。釣りのテグスを輪にして、とりつける。お米を少しまく。お米を食べに来たスズメの足が、そこに引っかかって逃げられなくなる。

このスズメも、私は食べていません。

（**コメントより**／「20 年くらい前まで焼き鳥屋で雀が出ました。数回食べたことがありますが、身はあまりなく、ポリポリ骨ばかりであまり美味しいものではありません。須磨のラジオ関西の横にあった“鳥光”(今もご健在です。)のスローガンは“焼き鳥屋と知らず雀が飛んでくる”でした」。「さんだわら、砂川で闘った学生さんは腹にさんだわらを巻いて機動隊の警棒から守った、のだそうです」。そうですか？　暴力団がドス用に？、お腹に週刊誌を巻いていたときいたことがあります。

●その３３＜竹トンボ＞

２種類ある。羽根だけ飛んでいくものと、心棒もいっしょに飛んでいくもの。

羽根だけ飛ばす竹トンボの方が、作るのに腕がいる。竹を飛ぶように加工して、その真ん中に穴を２つあける。心棒をグッルっと回して、羽根だけを飛ばす。

心棒もいっしょに飛んでいくものは、心棒と羽根をつけたら終わりだった。セメンダインで、つけたのかな？

竹トンボで、エッセイ＜その２３＞の「マッチ箱撃ち」もしていたかな？

もう、ほんと、しらんけど。

（コメントより／「父が肥後守を買ってくれて、最初は父に教えもらって作ってました。羽だけ飛ばすのは成功しませんでした。」。また先の山田さん、「軸をすりあわせ、右手を差し出しながら放すと飛ぶしくみが一般的です。左利きの人はどんな思いがしていたのだろう？　今の子どもは、左手を差し出したときに放す子が多く、当然、飛びません。親指を立てていることが多く、親指に当たることになり「痛っ」と声が上がります。右手派は微妙に親指は寝ています。このあたりの話は、けっこうおもしろいです」。

●その３４＜スピード（カードゲーム）＞

カードを赤と黒に分ける。２人でやる。

それぞれ、「セイノー」で、一枚、前におく。たとえば、赤が５、黒が１０とする。その５または、１０の前後のカードをそのカードの上におく。どんどんと、それをつづける。２名の手持ちのカードに、前におけるカードがなくなったときは、また「セイノー」と、カードをおく。

そして、自分のカードがなくなったら、勝ちだ。

頭と手を、バランスよく、機敏に動かすことが求められる。

実は、トランプでいちばん好きなのは、「DONKEY」だ。これは、エッセイ「トランプ、のるかそるか」

https://ksyc.jp/mukuge/hida-trump.pdf　で書いてしまった。残念！？

●その３５＜インデアンポーカー＞

こんな名前でいいのかと思うが、むかし、こう言っていた。

１０人ほどでやる。適当にカードを配る。「セイノー」と一枚をおでこにあてる。自分にはそのカードが何か分からない。が、他の人はみんな分かっている。

そして、ポーカーといっしょで、２が最弱、３から１３（キング）と強くなって、１（エース）が最強。同じ数字であれば、スペード、ハート、クラブ、ダイヤの順に強い。（この順番もおかしい気がするが、ここでは問わない）

相手のカードが強そうなので、場代（参加費、しょば代）だけで「おりる」こともできる。

が、勝負は、ここから始まる。相手の顔をみて、自分のカードの強さを推測する。そして、勝負するか、おりるか決定する。勝てそうだとおもったら、掛け金？をつりあげる。つりあげられて、すでに支払った掛け金がもったいないと、ズブズブ進んでしまうメンバーもでてくる。人生の縮図だ？

さらに、おもしろい展開もある。スペードのエースをおで

こに貼った人に、他の全員で、「しょうぶ」という。自分はそんなに弱いのかといって、その人が、おりたりする。

まさに、ポーカーフェイスが必要であり、だましのテクニックが必要であり、強いものに対する弱い者の団結力が必要なのである。

でも、しょせん、トランプ。たいしたことは、ない。

（**コメントより／**「この観察面白いです。よくやりました」。「昔は、インディアン poker と呼んでましたね😭。今は、ネーティブアメリン poker と呼ぶんでしょうか？？　それも、何処か違和感がありますね」。そうですね。

●その３６＜「かってうれしい、はないちもんめ」＞

「まけてくやしい、はないちもんめ」と、つづく。

１０数人で、２組に分かれてやっていた。手をつなぎ、けっこう激しく手をふった。前に歩き、後ろに歩いた。

「どこ子がほしい」

「あの子がほしい」

「あの子じゃわからん、名を呼んでおくれ」

（みんなで、そうだん、する）

「〇〇ちゃんが、ほしい」
「どうしていくの」
「□□して、おいで」
□□は、「ケンケンしておいで」「鉄砲もっておいで」などと言っていた。
みんなでやっていた。いつごろから女の子の遊びになったのだろうか？
さて、この遊び、「勝ってうれしい」と言ったが、ジャンケンでもしていたのだろうか？
（**コメントより**／山田さん、「♪うめーと、さくらと、あわせてみれば……と唄わなかったかい？　唄が終わって、ウメかサクラかをささやく。そうやって仲間分けしたわけ。その結果が“勝ってうれしい……”になった。♪ロンドン橋が落ちたで分けても、なぜかそのときも、ウメかサクラをささやいた」。「千葉の幼稚園で働いていた時、♪おかまかぶって～♪♪お釜底抜けいかれない♪♪お布団かぶって～♪♪お布団ビリビリ行かれない♪という不思議な花いちもんめに遭遇しました！」。「石井川の東側で、山王町で遊んでいたのを思い出しました。♪うめ～とさくらと合わせてみればうめ～の流れがびんとしゃんのシャッシャットーンと米ついてトーントン、うさぎが米ついてトーントン」。「この遊びしていました。僕の家は神戸市兵庫区の下町ですが、男の子も女の子も一緒になってこれでよく遊んでいました」。「♪どのこが欲しい～、あの子が

欲しい♪あの子で指名されなかった時のショックは大きい。最後まで。私嫌われていたのかなぁ(笑)」。それは、それは・・。「東京・中野でしたが確かじゃんけんしてました。“勝～って嬉しい花いちもんめ、負け～て悔しい花いちもんめ、あの子が欲しい～、あの子じゃわからん、この子が欲しい～、この子じゃわからん、相談しよう、そうしよう（相談する)、◯◯ちゃんが欲しい”で、指名されたらそっちの組に移ってました。懐かしいです！」。

●その３７＜へちま化粧水＞

　たくさん作った。果実を回収したのち、地面から１メートルほどのところでカット。先を瓶にさす。すると、瓶にヘチマ水がたまる。けっこうのスピードでたまる。

　母や幼稚園の先生に、たくさんくばった。使ってもらったかどうか、知らんけど。

　後に、私は農学部に進むことになるが、幼少期にその片鱗がみえていたようだ？　そのヘチマ水、保存用？、化粧品用？の薬品を買ってきていれた。すると緑色にかわった。

　石井幼稚園では、隣家との間に４、５メートルの石積みがあった。そこでヘチマをつくった。大きなのを２０本ほど？

収穫した。

写真は、学生センター近所の整体院の店で買ったヘチマ。大きい。１００円だった。幼稚園では、庭のたらい（盥）につけておいた。だんだんと果実部分がはがれる。何回も水をかえる。そして、ほす。「ヘチマ」が完成する。

今回買ってきたヘチマ。水につけると臭くなるという。そうかもしれない。おおきなたらいもない。ネットをみると、鍋で煮る、とあった。これでやってみようと思う。

去年、この整体院で、一年間畑でほっておいたという、ヘチマも売っていた。同じ１００円。色が少し黒くなっていたが問題なく使える。

ヘチマ時代の私の「片鱗」、今は、どこにもない。

●その３８「いいでんでん虫、悪いでんでん虫」

どこでならったのだろうか？

「世界には、いいでんでん虫とわるいでんでん虫がいます。これは、いいでんでん虫でしょうか、悪いでんでん虫でしょうか？」

といって、右手の人差し指で、左手の５本の指を、順番に、「でーんでーん、むしむしむしむしむし、でーーんでんむし」とさわる。

５本の指を順にさわってもいいし、飛ばしてもいい。指の間をさわってもいい。ちゃんと、相手も目を見て勝負しなければならない。
あたる確率が５０％、ではない。根拠があるのだ。エビデンスつきだ。さて、勝負！
「でーんでーん、むしむしむしむしむし、でーーんでんむし。」
「でーんでーん、むしむしむしむしむし、でーーんでんむし。」
「でーんでーん、むしむしむしむしむし、でーーんでんむし。」
すべてわるいでんでん虫。

１）　「でーんでーん、むしむしむしむしむし、でーーんでんむし。」
悪いでんでん虫。

２）　「でーんでーん、むしむしむしむしむし、でーーんでんむし。いい？」
いいでんでん虫。

このエッセイ、最終回なので、おしみなく、ヒントを与えてしまった。「でーんでーん、むしむしむしむしむし」とやるとき、この「むしむし」も何回やってもいい。どこをさわってもいい。オーバーにやる。
「いい？」というときに、相手の目をちゃんとみて、あい

ずちを求めなければならない
（**コメントより**／「これは、知らなかったです」。「これは知らなかったなぁー」。このネタは受けなかったようです。

＜あとがき＞

　ごらんいただきありがとうございます。まず、ここから読まれている方もおられるかも。でもＯＫです。
　さらにほしいという方も、おられるやもしれまのせん。本冊子をご希望者は、奥付住所まで、120 円切手 5 枚（600 円分、送料とも）を送ってください。　　飛田雄一

飛田雄一（ひだ　ゆういち、hida@ksyc.jp）

1950 年神戸生まれ。以下のエッセイ冊子を発行しています。

1. 『オカリナことはじめ』2020.11
2. 『センチメンタルジャーニー・湊山小学校』2022.6
3. 『ちょうちょう・はっし』2022.8
4. 『青春 18 きっぷの旅―伊那・宮田村、そして新潟』2022.9
5. 『ジパング倶楽部の旅―身延線、小淵沢、そして諏訪湖―』2022.10
6. 『ゆうさんの自転車生活 2007～2011』2022.10
7. 『ソウルのあるき方、のぼり方、のみ方』2022.11
8. 『ゆうさんのハイキング生活』2023.1
9. 『韓国岳」から韓国はみえませんでしたが、「開聞岳」から種子島はみえました』2023.6
10. 『中途半端な 青春 18 きっぷの旅 ―木曽駒ケ岳、小諸、白馬岩岳―』2023.8
11. 『源流から 170 キロをくだる「四万十川サイクリング」』2023.10
12. 『佐田岬から別府へ～フェリーでつなぐ、サイクリング』2023.11
13. 『八甲田山、〇〇の彷徨』2024.5
14. 『ひこうき、のるかそるか』2024.9
15. 『トランプ、のるかそるか』2024.9
16. 『列車、のるかそるか』2024.10

飛田雄一「あそびエッセイ」

2024 年１２月２５日発行

執筆・編集・印刷・発行　飛田雄一（ひだ　ゆういち）

〒657-0011 神戸市灘区鶴甲 4-3-18-205

e-mail　hida@ksyc.jp